

サ行音語頭自然地名の一研究

— スサノヲ神の一側面 —

井上 章

A Study of Japanese Natural Land Names
with "sa, shi, su, se, so" in Their Initial Syllables

— One Face of Susano-o-God —

Akira Inoue

序 論

自然地名研究シリーズとして山・野・川などの地形・地質・作用などに関する地名研究を続けたい。これら自然地名は神話・伝承と強く結びつき、意味・語構成にわたって体系性があり、また地名以外の解明にも有用な場合があることに励まされてきた。

論文題目の立て方も、本題は自然地名の研究であることを表し、副題が本論から導かれる問題であることを示すようにしている。

さて、サ行音語頭自然地名については、既に一部論じたことがある(サカ・サク・サコなど。本紀要第38集)。補足・修正すべきこともあるが、今回は紙面に余裕がない。しかもサ行音語頭の自然地名語は非常に多い。したがって既述の語は原則的に省略し、今回とりあげるのもサ・ス・セ語頭に限定したい。

ただ、省くシ・ソについても、筆者の考えている体系から外れるのではないことを簡単に述べておく。

まず「シ地名」について——前論文(本紀要第45集)において「アヅミ・アド」を論じたとき、九州は福岡の「アヅミ(安曇)」に「シカ(志賀郡・志賀島)」が関わり、近江でも「アド(安曇)」が「シガ(志賀郡)」に隣接し、能登半島では「アヅミ(安津見)」が「シカ(志賀町)」に属していること、また長野県志賀(高原)、滋賀県の滋賀郡・南滋賀町、信楽郡信楽町などを通してみれば、シガは「川が山を削って堆積した土地」に結びつく事が明らかで、シ地名は前論文にも当論文にも深く関係すると思われる。

ついで「ソ地名」は、古代からの名であり現代でも郡名に残っている「噺^{ハナ}」がある。これはもと「ソ」なのであるが、いわゆる「好字、二字表記の詔」によって母音を外がけに付加して表記したと考えられるものである(木の国が「紀伊」、津の郷が「都宇」など。本居宣長「地名字音転用例」)。この木・津の意味はわかりやすいが、前出の「ソの国」については「ソ(襲)」という部族の名か」という試論などあるにせよ、問題が残っている。噺郡は鹿児島県東部にあり、例のシラス地帯である。川の浸食が進んでいる。

また「曾根崎(大阪)」などの曾根地名を通してみれば、川の浸食・堆積にかかわる自然地名であると考えられる。

以上のとおり、シ・ソとも筆者の考えているサ行音語頭自然地名の体系に位置づけられるものである。

このように、今回紙数の都合で除外せざるを得ない「シ・ソ」地名についても、同一体系のものに収まるべき事を見通した上で、当面の「サ・ス・セ」に限って考察を進めることにする。

研究の方法については、先行論文で行ってきたことを踏襲する。すなわち、予備調査および先行論文で知りえた事を基に、課題地名語についての仮説を立て、文献や自らのフィールドワークによって実証して行く方法である。

その他、なるべく全国的に、史的な裏づけのある所をとり込んで対象とすることなども前論文までの方針を踏襲して行く。

地名のリストアップについて

〔体系の立て方〕

1. サ行一音節地名「サ・シ・ス・セ・ソ」のそれぞれを原形と称する。
2. 同一原形の繰返しササ・ススなどを原形の反復と称する。略して単に反復と称することがある。またサザ・スズのように連濁になったものをも含む。
3. 異なる原形の組合わせサス・スセなどを原形相互の複合と称する。略して単に複合と称することがある。
4. 上記1.、3.の形に、体言・動詞・接辞などがついた形を他語との結合と称する。略して単に結合と称することがある。この後に結合した語の品詞は必ずしも明確な区別がつかない場合もあり、強いて区別しない。この区別し難い形はカ行・タ行・マ行などに多いようである。
5. 活用性の語尾が付属する形を、語尾の付属と称する。略して単に付

属と称することがある。たとえば、セラ・セリ・サザレ川・ススマ・ススミ岩などであるが、これらの中には直ちに動詞と見たい例がある。

〔表記〕

以下、サ行音語頭の自然地名をカナ書き(歴史的仮名遣い)で示し、当該地名に漢字があてられている例を書き加える。従って、カナ表記は現代の慣行に違い、宛漢字の大部分は大和語としての本来の意味に違う(例の「好字」表記のため)。古代語や語源などを、学問的にとりあげるときは宿命的なことである。

〔地名リスト(サ行音語頭自然地名の体系的整理)〕

I サ(原形) 佐

(注) サカ・サク・サコ・ウサ・オホサなどについては既述(本紀要第38集)。

今回は、本論第二章との関係で、ウサだけはとりあげることになる。

1. ササ・サザ・ザザ(原形の反復) 佐々・笹・篠・座々・座散・楽・礫など

A 他語との結合——ササナミ(佐々並・漣)。ササヤマ(佐々山・笹山・篠山)。ササカハ(佐々川・笹川)。ザザヤマ(座々山)など多数

B 語尾の付属

a ササキ(佐々木・佐崎)

b ササマ(笹間)、ササミ(笹見)、ササメ(笹目)

c ササラ(佐々羅・佐々良・礫・楽・細石)

④ 他語との結合——サザライシ(細石)。サザラウラ(礫浦)。ザザラサハ(座々良沢)

⑤ 語尾の付属

サザラキ (佐々良木) ・ザザラキ (座散乱木)
ササラメ (笹良目)

c' ササリ (佐々里・笹利)

c'' ササレ・サザレ (佐々連・佐々礼・笹連・細石流)

(a) 他語との結合——サザレガハ (佐々連川)。

2. サス (原形相互の複合) 佐須・差

A 他語との結合——サスカハ (佐須川)。サスセ (佐須瀬)。サスタウゲ (佐須峠)。

B 語尾の付属

a サスミ (佐角)

b サスラ (佐須良)

3. サセ・サゼ (原形相互の複合) 佐世・佐瀬・佐是

A 他語との結合——サセカハ (佐世川)、サセノ (佐瀬野)。

B 語尾の付属

a サセブ (指夫)、サセボ (佐世保)。

II ス (原形) 洲・須

(注) スカ・スキ・スコなどには既説した例もある。本論文では特に必要なスガには触れる。

1. スサ (原形相互の複合) 須佐・周佐

A 他語との結合——スサノ (須佐野)、スサヂ (須佐地)、スサマチ (須佐町)、スサド (須佐渡)。

B 語尾の付属

a ササギ (須佐木)。

b ササミ (周参見)。

c ササレ (須佐礼)。

2. スス・スズ (原形の反復) 鈴・珠洲・煤

A 他語との結合——スズカハ (鈴川)。スズクボ (鈴久保)。スズクラ (鈴倉)。スズシマ (鈴島)。ススガヤ (煤ヶ谷)。

B 語尾の付属

a スズカ (鈴鹿)、スズキ (鈴木・鱸・須々木)、スズケ (鈴家)、スズコ (鈴子)

b ススマ (須々万)、スズミ (涼見・鈴見)、スズメ (雀)、ススマゴ (煤孫)。スズミ (涼見)、スズミイハ (涼岩)、スズミヤマ (涼山)。スズメイハ (雀岩)。

c スズリ (硯)、スズレ (鈴連町)

3. スセ (原形相互の複合) 嵩山・周世・須瀬

A 他語との結合——スセサカ (周世坂)、スセマチ (嵩山町)。

III セ (原形) 瀬

1. 他語との結合——瀬田^多・瀬戸・瀬川など多数ある。

2. 語尾の付属

a セラ (世羅)

(a) 他語との結合——セラザハ (瀬良沢)、セラタ (瀬良田・世良田)、セラガキ (瀬良垣)、セラク (世楽)。

b セリ (世利・瀬利・瀬里・芹・勢里)

(a) 他語との結合——セリマチ (芹町)。セリカハ (芹川)、セリザハ (芹沢)、セリタ^ダ (芹田)、セリタニ (芹谷)、セリヌマ (芹沼)、セリヤマ (芹山)

(注) 更に動詞 (動詞性語尾) のついた形

セリフダニ (芹生谷)

セリデ (芹出)

以上に示した分類・整理には既に体系化の過程が入っていて、その後には仮説がある。それは既に調査し終えた地名からの推理や、一部は今回基礎調査を済ませた結果などによる。

以下に仮説を示し、本論において実証的に諸調査の結果を照合し、仮説を確認して行こうと思う。

仮説1 サ行音語頭自然地名中、まずサ・スは、いずれも実体的(最も一般的なのは砂であるが、粒は砂利程度の大きさの物も含む)である。従って二つの原形(サ・ス)を組合わせる場合、「スサ(須佐)」と「サス(佐須)」とは、ほぼ同一の相を示すはずである↓仮説4

仮説2 サセボは濁れ谷で、海上の地形は高くもり上がっている。サとセとでは、サの方が実体的なので主語的になり、動作的・状態的なことをセが表していると思われ、いわば述語的である。そのセにラ行の語尾(動作的で、継続態なので結果的には状態とも)がついた語(セラ・セリなど)は、盛り上がった地形を表すと考えられる。

仮説3 一般にススる(墜)、サツサツと(颯々)など、同音を反復することから継続的な動作・性情などがあらわされる。

さて、スの持つ浸食・崩壊の土砂音(土砂自体の崩れる音、人が足を踏み入れなどした音、更に水流が関わったりした場合など広く)が、反復・継続の表現でスス・スズとなり、更に動詞性の語尾を伴えば、崩壊・堆積などの進行相を表すと考えられる。

よって、ススマ・ススミなどの地名は、浸食・崩壊・洪水などによる堆積・平地の形成などが進行する相を表すはずである。

仮説4 ①スサノヲ神が地上に降ったのは本来は、自分の希望であった。そして②自らの名を自分の神鎮る所につけて^(古事記)いる。更に③スサノヲ神の身体より植物が生じて^(古事記)いる。この三点からしてスサノヲ神は大地そのものを含むと見られ、行動的には暴風雨・洪水・土砂崩壊などの「荒む神」である。

これらによって、スサノヲ神の神鎮りました所は、「荒む」土地相(土砂崩壊など)を示すであろう。↓仮説5

仮説5 スサノヲ神は、その神鎮ります所を「小さき国なれども、国処なり」と認めた。単に「荒む」のみならば「国処なり」という褒めた評価は不自然である。ではその「よさ」はどういう点か。それは、スサノヲ神が地上に降ってからは一貫して農業(特に稲作)の保護推進

に努めた点からして、稲作用農地として好適と認めたものと考えられる。これから導かれる仮説は、仮説4の崩壊土壌が稲田を形成するに至るであろうこと、ならびに稲・稲作用地に関する地名がササ地方に見つけ出されるであろうこと、である。

この第5仮説は二段構えになっている。即ち、スサノヲ神の妻をはじめとする親族神の名は①稲作に関する地名によって解釈できるであろうことと、②その地名がスサノヲ神の天降りく神鎮るに至る当該地域に関連的に見出されるであろうこと、である。

本論

第一章 サ行音語頭自然地名の地相

第一節 サ地名の地相

I 「サ(原形)」原形単独のサ地名は少く、明瞭に把握できるのは、左記の一例のみ。他には金沢市に二カ所「佐」地名がある。

佐(村)——茨城県筑波郡大穂町。大曾根の北2km。筑波山の北西から流れる桜川(この桜も浸食・堆積を表す)の中流右岸の低地と、それに続く筑波稲敷台地の東縁辺にある。低地はもとヤトで水田。台地上は畑・山林・原野・居住地。佐村域内には縄文中期・後期の「佐遺跡(集落跡)」があり、円墳12基、勾玉・直刀・管玉が出土し、これらによって、桜川河岸段丘上の生活史の古さが知られる。

サ地名の地相は、右のような単独形ばかりでなく、上に修飾語がついた例でも知られる。代表を大分県宇佐にとって述べる。ここは以前サカ等^坂について論じたときにとりあげたが、なお不十分であった点を明かにしておきたい。

ウサを特に問題にするのは、日本の神社の中で最も数多く全国に分

布している八幡神社のもとが宇佐神宮だからであるが、この宇佐の神は、自然神・武神・外来の宗教（佛教）の影響の強い神など、複雑な性格を帯びていて、真に古来のものの意義が不明瞭になっているなどの解明すべき問題があるからである。

このウサという地名は、宇沙（記）、菟狭（紀）の表記で、いずれも御東征の道中、ここでウサツ彦・ウサツ姫が、大みあえ奉った話に出てくる。この「○○ツ彦、○○ツ姫」と組合せた名は、「アキツ彦・アキツ姫（港・川口の神）」に見られるように、自然地名であると思われる。

このウサの地勢を概観すると、後背山地が三段階に考えられる。まず宇佐神宮に近く、本来御神体とされている御許山647m（馬城峯山）があり、更にその西方に続く大蔵山543m・和尚山327mがある。これらから流れる奇藻川が宇佐神宮のすぐ北を横切る。次に奥なる山々は安心院・院内を隔てて東から立石山1059m・人見岳921m・雛戸山831mなどである。更に広く見れば、耶馬溪溶岩台地に続いている。

川は同じく東から佐田川・深見川・恵良川をはじめ、谷は多数のぼり、ほぼ北に流れて下は合流して駅館川という。これらが山地を浸食し、断崖が多く、川にはさまれた部分は尾根（舌状台地）となる。

中流には堆積盆地があり、川下は扇状地と、それに続く海岸堆積地が隆起してできた平野である。これが東方は国東半島付根部から、西方は福岡県境に接する中津市まで続く（中津平野）。

さて、宇佐郡は山地・盆地・平地にかけて広いが、ウサは、山地の崖と低地の平野とのどちらかに重点があるのであろうか。実は前に発表したところは、低平地になかり重点を置いて考えていた。しかし、今は山地平地を組み合わせて考えている。その理由は、たとえば広島県山県郡太田川ぞいの宇佐は崖地が勝ち平地はごく僅かであり、山口県玖珂郡宇佐の場合は川が合流している分、広島島のよりはやや平地が広

いと言える程度である。類似地名のオホサも同様である。こうしてみると、オホ・ウがいずれも「大」の意ではあっても決して平地が大きいというのではない。その所によっては崖・浸食地の方が大きいと言える。山口県の宇佐のすぐ上流の山は寂地山と言ひ、強度な浸食地形をもっている。

このように、自然地名は後背山地との関係で見なければならぬ例が多い。大阪・嵯峨（京都）・佐賀（県）・安満（大阪）など、いずれも上流の浸食地と下流の堆積地とが同名で呼ばれる例で、大分の宇佐にも共通点がある。川的作用が「ここまでは浸食でここからは堆積」など境界はつけられず、一連であることから自然に起ったことと考えねばならない。

さて、地相の実証的な記述の章に以下の点を述べるのは論文構成上望ましくはないが、本論文はスサノヲ神とその一族神との自然地名上の結びつきを論するのであり、ウサに関係があるので簡単にのべることにしたい。

宇佐神宮は上宮・下宮とも二之御殿に比売大神すなわち市寸島姫・多紀理姫・田寸津姫を祀る。一之御殿は八幡大神、三之御殿は神功皇后で、この三殿が並んでいるが二之御殿が中央であるから、これを中心と見るべきであらう。

この三姫神はスサノヲ神の娘である点に筆者は特に注目したい。しかも当地方に強い結びつきのある氏族が豊前の辛嶋氏であり、その系図がスサノヲ神を祖としてしていることと言ひ、そのスサノヲ神の三姫神が筑紫の大元山に天降ったことと言ひ、これらは取りもなおさず、当地方も出雲と同じく「スサノヲ神とその娘」の組み合わせが深くかわっているのを見たい。山地の浸食や崩壊（荒）に発して下に平地（農地・特に稲作用地）を生じた事を、父—娘の關係で表しているのと類似であると考えるものである。補足したいことも多いが、今は、御許山頂の八坂神社はスサノヲ神を祀ることを述べるにとどめる。

「サ」の一首節原形を終えるに当り、先のウサとは反対のサ○の形を一つだけ追加する。

それはサダ(佐田・佐陀)で、西日本に多い地名である。これは地形的特徴で二つに大別される。一つは山に囲まれた比較的小さい土地であり、もう一つは細い崖状の岬である。実はタには大別して二種あり、一つは水田であって、その例は枚挙に暇ない。しかしもう一つは水田のタとはむしろ反対の性状の「不整崖地・急斜面」の意味である。(にもかかわらず「田」と表記するから紛らわしい)。崖地である。

「田」の例は、埼玉県秩父町太田部、鹿児島県沖永良部島田皆、秋田市内でも檜山太田町は金照寺山・一つ森の麓で起伏が多い。

これらを見た上でサ地名に戻ると、これまた急傾斜を表す例がある(サカ)の原義。すると、サ十タの場合、同義の重複であるか、またはどちらかが実態的で、他方が修飾的・補足的であるかのいずれかである。サダを狭田と書く(そう解する)のは後者の例で、状況から否定できない。海岸近い沖積地などならば更に広くなり得るが、こういう土地は山や海に囲まれていて狭い——と共に、もう広さが決まっている。筆者は、ここに「定・貞・適齡」などのサダの語源を見る思いがする。

II 「サ」の反復・複合等の例

1. ササ——これには全く同音語で「笹・篠」があり、全国どこにもある品種ゆえ、ササの地名はとかく「笹が生えているから」のような安易な地名語源を結び付けられ勝ちである。元来植物単独名をそのまま地名にあてる語源観は危険である(桜・梓など)。本論では、そういう紛らわしさを避けるために、表記上も笹・篠の字を使わない例、およびササに植物を宛てて解釈しては不自然である例をもって考察する。

ア、サザ(佐佐) 長崎県佐佐町。長崎県は半島・岬・湾・島の入り混んだ地形に特色がある。音声的には下を濁ってサザであるが既

に多くの例を見てきたとおり、清音と同じに扱ってよいと思う(タカータガ、タコータゴ、アターアダなど)。現に当地方海岸に「佐佐浦」があってササウラである。

地形的特色は、東方の世知原高原から流れる佐佐川によって開析された谷筋であり、佐佐町より下には平野が発達している。この佐佐川は断層に制約された川で、上流域は浸食谷が見られ、中流下流には河岸段丘と沖積平野とが見られる。河口付近には多量の土砂が堆積している。

なお、この支流は流路の争奪などあって断層に沿う直線性はありながら一面では複雑な相を示す。

地名辞典では「佐佐」の意は不詳としているが、高原性の地形が断層と川の浸食とによって不整形な地形をなした様をいうと考えられる。

イ、ササウラ(桑々浦) 兵庫県城崎町。有名な温泉地城崎の、円山川を挟んだ対岸であるが、地質は淡灰色の石英から成る目の粗い岩質の凝灰岩である。地形は浸食が進んで複雑である(建築用材としての切り出しが加わって複雑さを増している)。

ササは当岩石の崩壊・浸食の擬音であろう。表記の「桑々」はササラなどの楽器の表記を応用したと思われる(万葉集でササラの表記に「桑浪」。↓ススマ参照)

ウ、ササガハ(笹川) 新潟県岩船郡山北町。新潟県北部日本海岸である。この地名を考えるためには、背後の「葡萄酒地」から見なくてはならない。この「葡萄酒」という地名は、岐阜県上宝村のブドウ谷というカナ書き例以外、新潟県、長野県より東(東北)にある地名である。この新潟県岩船郡の葡萄酒地は、東方の山形県との境をなす「朝日山地」から断層運動によって分離した傾動地塊である。地質は大部分花崗岩。山地の成立がこのとおりであるため、地形は起伏や断崖が多く、葡萄酒は最高点が僅か263m

にすぎないのに「天下の難路」とさえ言われた。こういう所を流れる笹川は、懸瀑あり曲流あり、花崗岩質の土地を浸食して流れる。よって笹川といふのは崩壊・浸食された岩石の立てる音・水流の音などを総合したものと思われる。最上流部の漏斗状の浸食谷は特に大きい。なお、海岸の地形は直接「ササ川」の名には関係ないと思うが、この海岸は変化の多い海食の岩浜である。

2. サス(佐須) これも表意的な漢字をあててない例で観察する(以下、一々言わない)。

このサス(佐須)地名が思いがけなく東北地方に三カ所あり、他に愛媛に一カ所。

ア、サス(佐須) 岩手県釜石市平田

リアス式海岸の中で、釜石湾をかこむ南側の岬にある小漁港。

岬の山は急崖などの複雑地形で、板状節理のある岩盤が目立つ。

佐須は深く切れ込んだ急傾斜の谷底集落で、この佐須とよく似ている。

イ、サス(佐須) 宮城県石巻市渡波

石巻湾に面する牡鹿半島つけ根の位置。「焼畑による開墾地

(宮城県地名考)」「砂州の意か(宮城県地名大辞典・角川)」などの

説あり、後者は集落のある海岸低平地については妥当する。た

だ、平地はごく狭く裏山は土砂流を生じやすい所である。一帯の

海岸は崖が多く、この岬は岩石で起伏が多い。岩盤は板状に節理

し剝落を生じやすい。

ウ、サス(佐須) 福島県飯館村佐須(佐須峠)。

福島市東方20km。北側の伊達郡霊山町(行合道)と相馬郡飯館

村佐須を結ぶのがこの峠で、全体の位置は阿武隈山地の北部に当

る。分水界に当り、起伏・曲折が多い。

所々に相当規模の土砂崩壊のあとが見られ、その下部には比較的緩い傾斜地が続いている。土は極めてくずれやすく、従来の工事規準で建設された道路わきの傾斜面など、見ている目の前で土・石が次々に剝落して行くほどである。

エ、サス(佐須) 長崎県敵原町(対馬)

島は標高1000〜3000mの低い山地が多く、細い谷が無数に刻まれて海岸に迫り、平地が少く海岸は絶壁が多い。地質は脆弱な泥岩・砂岩が多く浸食を受けやすい。佐須は対馬の中で最も水田がひらけた所で、一般には「砂州」と解されている。佐須峠は険しい坂道として知られていた。

3. サセ(佐世) これも具体的な意味を持たない表記例で観察する。

ア、サセ(佐世) 島根県大原郡大東町。ここは上・下にわかれている。斐伊川・赤川に挟まれた位置で、鉄道もサセを迂回し、S字状に通じている。峠となった緩い起伏があり、後述するセリ地名(芹谷)がある。風土記の地名説話(スサノヲ命がサセの木の葉を髪に刺して踊った時、この葉が落ちたので佐世という)は取るに足りないが、スサノヲと縁がある点は諒とし得る。

イ、サセボ(佐世保) 長崎県佐世保市。

前述のサザと隣接し、地相的にも類似である。

東に八天岳・隠居岳、西に将冠岳・但馬岳・弓張岳が連り、赤崎岳に続いて俵浦半島へと伸びる。当地内のはほ中央、佐世保市の東側に烏帽子岳が聳える。これらの山は「高く聳立す：雲際に聳え：」など形容されている(郡村誌)。

なお、隠居岳を源とする相浦川は、国見山系を中心とした溶岩台地を流れるが、そこに断層運動による構造谷があり、それを浸食・分断して流れている。深い谷筋の流域地質は、標高約300m以上の上流部に玄武岩があるが、中流・下流は相浦層群とよばれる第三紀層砂岩と頁岩から成る。河床のポットホールは近年の

改修で殆ど消滅したが、浸食の現れであった。

また佐世保市内も浸食による高低差が強い点で共通であり、しかも古い谷筋の斜面の麓が須佐町である。更にその斜面の中に須佐神社があるとすると、結論二に述べるとおり、自然地名が地形と強い相関をもつことの証となし得るものである。

第二節 ス地名の地相

I 「ス(原形)」純粋に単独のス地名は、これまで極めて少い。そして具体的意味のない漢字表記例となると更に少い。

「州・洲(これは川による砂の堆積地という具体的意味をもつが)」をあげておく。

ス(洲) 岡山県笠岡市白石島。全島花崗岩で、山は高く、浸食された細粒が海岸に堆積しているもの。

この州・洲の合成地名は夥多に上り、代表をあげるに苦慮する。ただ、幸い、単独の場合ともに、下流部の砂の堆積地についてはほぼ正しく理解されている。従って特に論ずべき事はないが、注意を要する点だけ触れておきたい。

実は、再三指摘してきたことであるが、自然地名は静止的に見ては正しい理解が得られない。(動態・生成の観点で見るときで、例えばアキ地名は、上流部の土砂の剝落・崩壊く下流部への堆積という一連の動態を表す)。下流部・海岸などの洲は、はじめから固定しているのではなく、一洪水ごとに高く広くなったり、位置や形が変わったりするもので、いわば生きているものである。上代人の名づけにも、そういう動態的見方が根源にあったと見なければならぬ。

広い洲ができるためには、崩れやすい山と水勢の強い川とが必要である。この点から山の性質(地質・地形)・川の性質(水流の量・速さ)が大きく関与する。即ち大地を性状的にも見なければならぬ。

このように自然地名の解明のためには大地を動態的に性状的に観察

せねばならないものと思う。

II 「ス」の反復・複合等の例

1. スサ(須佐) 前出のサス(佐須)を倒置した形に当る。概然的にはサは沙・砂、スは砂・洲を言うと言えるが、かかる意味は、今のべたように一般には低平地に堆積した物を表すのであって、それを生み出した根源については考慮が払われていない。

さて、スサという地名が集中的に見られるのは山陰地方である。
ア、スサ(須佐) 島根県佐田町。

日本神話で有名なスサノヲ神社の所在地(この地名もスサノヲ神が自分の名をつけたとされる——風土記)である。当地についての説明をみると、この風土記を引用する事が多く、スサの語義に迫るものが少い。実はそここそ問題の根本があるのだと思われる。

この風土記の説明などとは反対に、自然そのものを根拠に地名を考え、その地名にかかわる神話・神名・伝承を説明しようとするのが筆者の方法であり、そのためには当地の自然・地相の説明こそ必要なのである。

辞典の種類で参考するに足るものを示すと、たとえば百科辞典・地名辞典などの「山陰地方の総説」「島根県・山口県の地勢解説」などの項である。これらによってまず根拠とするに足るのは、

⑦ 中国山地が北に迫り、当地は全体的に強い傾斜の中にある。

⑧ 中国山地は大花崗岩より成る浸食された高原である。

⑨ 神戸川系はよく風化した花崗岩地帯と軟弱な第三紀層地帯を流れるので、下流に広大な沖積平野を作った。

の諸点であるが、肝腎の佐田町須佐がどういう地相なのか説明されていない。むしろ風土記の『此の国は小さき国なれども、国処なり。故、我が御名は石木には著けじ』と詔りたまひて、即ち、己が命の御魂を鎮め置き給ひき。然して即ち、大須佐田・小須佐

田を定め給ひき。故、須佐といふ。」が参考になるほどである。この中で、『古代地名語源辞典（東京堂）』の

スサ（荒）ムという動詞の語根と見れば、「川や海岸などの荒むところ」、すなわち「洪水で荒れやすい地」、「風浪の荒ぶところ」の意となる。

という説明は、スサ（荒）ムという動詞にあてはめて演繹したものが注目に価する。この説明は序論に記した筆者自身の仮説（特に仮説4）と重なるからであり、その実証こそが肝要なのである。

そこで、筆者はフィールドワークを重ねることになる。前に記したように、全体的には傾斜が強いのに、たとえば出雲市から神戸川を遡行する国道184号を南下して行っても、大切な御田・宮内から須佐にかけて思ったほど急傾斜ではなく、起伏もさ程ではない。ただ途中には立久恵峽という風化浸食を受けた石柱・断崖・奇岩・怪石が連続する風光地がある（須佐からは10km余で離れすぎますが、このクエが浸食の意である）。

ところで、平成5年11月、このコースで訪れたとき、佐田町役場にも近い須佐川ぞいの道路わきが地崩れしているのを見つけた。しかも護岸工事したコンクリート壁が崩れているのである。これによってスサ地方が崩壊などの著しい所であろうとの心証を得た。

古代の須佐郷は現在の佐田町から更に奥の掛合町（穴見・入間）（風土記、和名抄、島根県地名大辞典、角川）にわたっていたから、少しでもそれに近い道筋で見ようと思いい、平成6年3月末には宍道町から三刀屋を経て、東側の山地を越えて入ってみた。想像以上に起伏曲折の多い道であったが、宮内が見おろされる辺まで来ると新しい道路の工事中であった。旧道こそ見るべきなので、そのままつづら折りに山を下ると、路肩から崖崩れが起り、曲折して続いているこの道の下を埋めてし

まっている。車を降り、崩落土を渡って下までおりてみると、その崩落は下の棚田に届いている。更に下から見上げると、その棚田そのものが、かつてそうした地崩れによってできた斜面で、後に農地として整えられたものであることは一目瞭然であった。

当地の川は大きいとは言えないが、ほぼ須佐神社のある所を境にして上流は曲折や滝状の所が多く、浸食はなお現在進行していると思われる。

また、逆に神社より下流に当る、佐田町毛津（マツ）の地区は地質が真砂系で、山崩れが起こりやすく、幾度か災害にあっているとの記述がある（島根県地名大辞典・角川）。

こうして、須佐の地が、土砂崩壊が多く（荒（ム）であり）、その崩壊土が農地（稲作用地）となり、また下流の平野の源であることは間違いない。

イ、スサ（須佐）山口県阿武郡須佐。

前者と同じ山陰である。中国山地は、島根県より更に海岸に接近し、急傾斜である。また海岸が沈降性で海食崖が形成されている。特に須佐海岸のホルンフェルス（頁岩と粘板岩とが層状に重なって海食崖にその断面を見せているもの）が有名で、須佐と言えばこれを想起する人が多いであろう。荒々しく削られたこの景も「荒（ム）」でないこともないが、その後背地が起伏の大きい土地で、島根の須佐と共通している。ついでに、山口県のここが「阿武郡」であることも注意される。福島・宮城を貫く阿武隈川も、山の中の険しい谷間を曲折して流れる。その点、山口県の阿武川も同じである（大阪府茨木市・高槻市境の阿武山も浸食甚しく、麓に崩壊土壌が多い）。一方山口県の須佐も麓の平地に稲作が行われている点、島根県の須佐と共通である。

ウ、スサギ（須佐木）栃木県那須郡須佐木

山に囲まれ、川に沿った小平地のある村。島根の須佐のように

2. 「小きき国なれども、国所なり」の感じである。
 スズ・スズ(須々・煤・鈴・珠洲)

ア、スズ(珠洲) 石川県珠洲郡

現在の発音はスズであるが、和名抄は「須々」と注しているから清音の重複であったと思われる。当地名について、「ここは古代軍事上の要地であり、「烽(狼煙)」の古訓が「すすみ」であるから「烽」の意であろうとするのが従来有力視されているが「ミミ」はないのであるし、地内に「鈴」地名があり(鈴内||珠洲市、鈴屋||輪島市)、後述のとおり鈴は崩壊性の土砂、およびそのような地相を表しているから、ここも同様とみる。例の佳字表記であろう。鈴内川沿いの横穴群、神明社のダゴの宮の名など、いずれも段丘・崖・浸食などの相を表すものである。

イ、スズ(鈴) 山形県西田川郡

海岸に崖が迫り、崩壊の相。海中に米俵のような石が累々ところがつている。

注、「錫」鉱石は砂状または石英・水晶などに介在して産する。

ウ、スズマゴ(煤孫) 岩手県和賀郡和賀町。

「須々孫」とも書いた。北上盆地の西部で、和賀川が東に流れる。その右岸の沖積地段丘上にある。段丘崖は比高30〜40m。なお和賀川の支流がこの段丘崖を浸食して合流している。

この地名についてアイヌ語のススマク(柳などの湿地植物の繁茂する所)の意とするものがあり、結果的にある程度は妥当であるが、ここに限定して名義を考えるべきではない。和賀川が西方より沖積(一方で浸食)を続けた地形であり、全体的なスズ・スズ地名の共通性で考えるべきである。「煤」はあて字にしても、ある程度崩れやすい性質を表している。「孫」は「間(名詞)」または「動詞性語尾」(多分後者)に、更に「所(名詞)」がついた形であろう(次項参照)。

エ、スズマ(須々万) 山口県徳山市。

市街の北方10km余の所で、山間の沖積土壌で水田が営まれている。周縁の山の麓は剝落・崩壊相を示し、比較的近い類似相の所に「須万」が2カ所あり、同一の目で見えるべきものである。「ス間」であろう。同じマでも須万・須磨などはスが一つであるだけ動作性が稀薄で、マの方も名詞的に見られる。それに対しスズマはスの重複によって反覆・継続の状態や動作が感じられ、マの方もそれに伴って動作性が強くなっていると判断した。

須々万の周縁の崖面は現在も崩壊を続けていて、田の高さは明瞭な段差がある。即ち、これを目の前に見ると「崩落し平地化が目の前に進んでいる」と思わざるを得ない。ただ、文法でいう未然形に語形が一致するから、「そうならない意味だ」など考えるのは全く当を得ない。活用形が文法的意義を分かちもつ以前の用法が残っているものと思う。

なお近くに前述した「ササ地名」があり(葉々谷)、以て総合的に崩落し平地が形成される過程を表した自然地名と見られる。

オ、スズカ(鈴鹿) 三重県・滋賀県境(鈴鹿山脈・鈴鹿郡・鈴鹿峠)

鈴鹿山脈は伊勢湾と琵琶湖の間の、幅50kmに高さ1000〜1200mの山脈があるもので、傾斜は西側緩く東側は急傾斜である。当地の地形に強く関係するのは断層で、山脈に平行して「確実度1級の活断層」が走る。特に東側は三本ほどが並ぶ。山脈の南端部は西に曲っているが、この辺が最も断層の多い所で、かつ鈴鹿郡であり鈴鹿峠もこの中にある。

地質は、基盤が砂岩・頁岩・チャート(皆浸食をうけやすい)の外・石灰岩を含む古生層で、南部には中生代に侵入した花崗岩類が広く分布する。

地勢については、古くから断崖絶壁・奇岩と美しい溪谷群とをもって知られていた。

崩れやすい地質・地形・急傾斜が重なれば、川の下流には必然的に土砂が堆積する。そうしてできたのが「関・亀山」を扇要とする扇状地で、関西線・紀西線の鉄道が挟む三角形が、ほぼそれに当る。

地名語源については、地内の山に生ずるスズタケに由来すると言うが、いかが。これはヤダケのことで大型の笹・篠竹をいう。

全国的に分布し、当地のみに生えるのではないし、スズ・カの語形の説明も十分ではない。述べてきたとおり「スズ（崩壊性地形：）十カ（所）」と考える。竹の名なども、スズ（草）に生えるからスズ竹というと考えた方が自然であろう。

3. スセ（嵩山）愛知県豊橋市。

ア、この地名（山名）は、「当地の正宗寺の開山日顔禪師が、この山が達磨大師の故地嵩山に似ているので名とした」のように言われているが、地名の起りの説明としては逆であろう。表記についてはあるいはそうかと思われる。しかし、こう説明してもスセという地名の真義は何ら説明されていないのである。

ここは愛知県・静岡県境であり、標高3000〜5000mほどの山脈が続いている。谷をはさんで、尾根状の山が低地部をとり囲んでいる。この谷は浸食が強く、中央の川（神田川）に至る瀬は急流である。

地質上は、石灰岩が多く、鍾乳洞「嵩山の蛇穴」がある。またこの入口付近の堆積土から縄文早期の土器（押型文）や獣骨などが発掘され、当地が古くからの生活用地であったことが知られる。

このスセは、やはり浸食―堆積の相をあらわして、スは砂・洲で崩壊の意味、セは地の盛り上りの意で、前出の「サセ（砂十迫上り）」と類を共にする。浸食によって鋭く聳えた山が残ったもの。なお近くの類似地形の所にスサノヲ神社あり。

イ、スセ（周世）兵庫県赤穂市。

赤穂市街の東北方に当る。北は有年横尾、西は真殿、南は高野と千種川を隔てて高雄、東は相生市（との境の山地）。山で囲まれ、千種川で削られた谷底地形。周囲の山はかぶさるような感がある。

第三節 セ地名の地相

1 「セ（原形）」

純粹に単独でセという地名は、愛媛県長浜町瀬というのがあるが、具体的な意味でない表記の単独例は見出してない。合成地名は多い。セの意味については、川の浅瀬・海湖などの岸のように水に密着した場合は殆んど問題ない。この場合は大体水音の擬音であろう。

しかし注意を要するのは、必ずしも水に密着していると思われない場合である。セ単独の例からはこのケースが見当たらないが、水に密着した場合と同語なのは「通常流れなくても、豪雨などで水が流れれば同じ音がする」という経験に裏づけられたものかと思う（この点、前述のサやタなどにも共通する）。瀬は訓よみである。

このセについては、便宜上、「カ」が後接した「セカ」をとりあげておく、このカは、品詞的には形式体言であろうが、様態または動作態のような意味が感じられるものである。語形的にも「サカ（坂）・タカ（高）・スカ（州処）」などに対応する。

ア、セカ（瀬加）兵庫県神崎郡市川町瀬加。

姫路市の北々東20km余。この方向から市川が流れる。瀬加は、その支流岡部川に沿い山の麓に当る。上瀬加・下瀬加に分れている。

ここは、播磨国風土記、神前郡に「勢賀」として記載し、「品太の天皇が狩をなされ、獲物の逃げ道を約き出して殺した。そこで勢賀という。」との故事を示す。もちろん地名にあわせた語源説であろうが、岡部川は両側を高い山で挟まれた形で、地形自体が「塞かれ

た」形と言い得る。よって風土記の話にも傾聴すべき点がある。さて、前節までは「原形の反復」や「原形相互の複合」の例があったが、セについては、「セセ」「セサ・セス」など目ぼしいものがない。直ちに「語尾の付属」に入る。

〔語尾の付属〕

1. セラ(世羅・世良)

ア、セラ(世羅) 広島県世羅郡。

広島県東部で吉備高原に属し、「世羅台地」とも言われる500m前後の台地である。この中には第四紀になってから噴出した玄武岩の山もある。世羅町を流れる三川く芦田川は瀬戸内海へ、西世羅町を流れる美波羅川く江川は日本海へとそれぞれ流れていて、両町間12kmほどが分水界となっている。この台地を削った川は、中に盆地状の平地を形成している(世羅町など)。ここは、山がせり上っている意味か、川の堆積で平地がせり上ったの意味か、区別がつき難い。

イ、セラダ(群馬県太田市世良田) 利根川に流入する支流ぞいの小丘陵地。

ウ、セラク(茨城県東茨城郡世楽) 北浦に注ぐ巴川ぞいの微高地。この語形は、アテラに対しアテラク、サガラに対しサガラキ(ラカ・ラク)があるのと対応する。

注 なおセラ地名には、セラザハ(青森県鶴田町世良沢)、セラガキ(沖縄県恩納村瀬良垣)、セラバナ(鹿児島県東町セラ鼻)などがある。

2. セリ(芹・世利・瀬利・瀬里・勢里)

セリ地名について、研究の過程に沿っていえば、下に名詞がついた形が秋田県内にあり(芹田・芹沢)、その語根としてセリが注意され、その対応形としてセラがとりあげられたものである。ア、セリ(瀬利) 兵庫県多紀郡。

山間の田園地であるが、田の面に段差が顕著で、両側の山ぞいよりも、中央部が高い。周囲の山は花崗岩崩壊相。

イ、セリ(世利) 大分市。七瀬川左岸。この川は阿蘇熔岩を深くえぐって流れ、川筋の下流に堆積した(ウ、芹川、参照)。

以下、体言等が後接したものを示す。

ウ、セリカハ(芹川) 大分県直入郡。

有名な観光地久住高原に発し、下流は大分川に合流する。芹川およびその支流は同様の相をもち、曲折した急流部が火山灰・熔結凝灰岩を浸食して狭長な谷底平野を形成し、かつ灌漑している。この支流群には流域の地質が少し違うものもあるが浸食を受けやすい点は一致している。かつ洪水を起こしやすいので、芹川ダムが作られた(灌漑・発電を兼ねる)。

なお、この川口に当る大分市には七瀬川(大分川支流)があり、その左岸に(芹村)がある。やはり川の浸食・運搬作用の結果、下流部に土砂が堆積し、セリ上った所である。

エ、セリカハ(芹川) 滋賀県多賀町く彦根市。

かつてタガをとりあげたとき、「(当地の)川が水音を立てて流れる」一点に注目し、結果的に「滝タキ」との関連を考えるに至った。当時は川の上流部にはあまり注意を払っていなかったが、その後、後背山地の山相を合わせて考えるようになった。その目で改めて当地をみるとこの多賀を通って彦根で琵琶湖に入るのがとりもなおさず「芹川」であり、これは詳細に見なおすべきものと考えられた。

↓結論二。

この芹川は、滋賀県・三重県の境に近い霊仙山中腹に発し、上流部は数本の断層のある山地を険しい谷をうがって曲流し、多賀町八重練付近から平地に出るが砂防ダムや堰堤があり急流である。旧河道は彦根市街の東部で北に曲り金亀山の東を通って松原内湖(彦根市の北)に注いでいた。これは、自らが作った土砂堆積によって流

路が塞がれたもので、その町名が「芹町・芹川町」なのである。

「芹」の字を書くセリ地名の所には、かなり共通的に「芹が生えているから」というような語源説があるが、逆に、川ぞい・湿地などに「芹がよく生える」のであって、自然地名が産出母胎となって生育する植物名に転じたものであろう。あるいは、芹との関係は文字表記上の借用(あて字)で、植物としての芹は「嚼むときの音」という方が当たっているかと思う。堆積土の砂利シラリの音と類似する。

オ、セリタ(芹田) 秋田県由利郡仁賀保町。

当地方を代表する鳥海山の最大の谷をつくっているのは白雪川であるが、その川が、日本海岸にまるくもり上った岬をつくっている。それが芹田である。

この点、左のセリ地名も共通である。(川名は異なる)

- 山形県遊佐町芹田(セリタ)
- 新潟県南魚沼郡大和町芹田(セリダ)
- 秋田県北秋田郡合川町芹沢(セリザハ)
- 鹿兒島県沖永良部島瀬利覚(セリカク)
- 沖縄県浦添市・伊是名村、勢理客(セリキヤク)

以上、諸資料の内容やフィールドワークによる実地検証によって、序論にのべた仮説はおおよそ実証されたと信じる。

さて、サ行音語頭自然地名は非常に多く、シ・ソを省き代表的な例に絞ってさえ紙面が足りない。それらについては後日を期することにして論を先に進めたい。

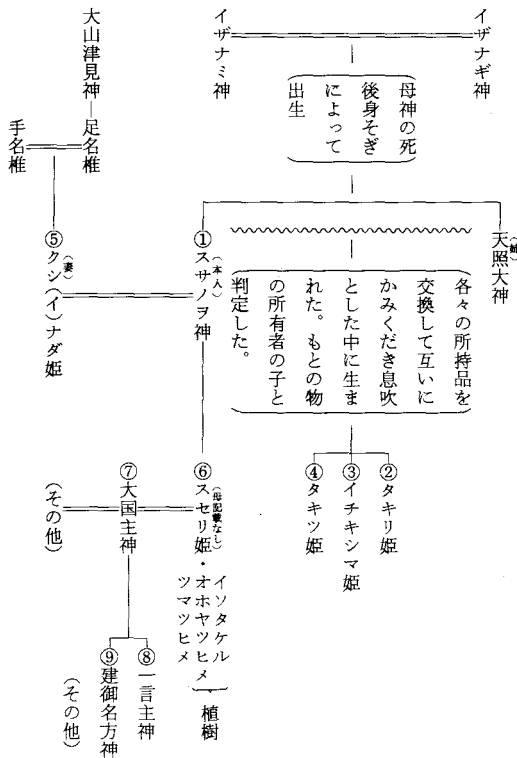
第二章 サ行音語頭自然地名と出雲系神話

サ行音語頭自然地名は、出雲系神話とりわけスサノヲ神に強い結びつきがある。この神の神話的意味については種々に(たとえば、荒神・武

神・鉄生産と関係あり・外来神など)論じられているが、今一々を引用や批判など述べる紙数がない。この度はとりあえず自らの考えを述べることにする。

まず、関係する神々の系図を掲げる。

〔スサノヲ神を中心とする系図(要)〕



この中で、系図上の地位と名義との結びつきに問題ないと思われるのはクシ(イ)ナダ姫である。大山祇神オホヤマツヒメの子足名稚と手名稚との娘であるから地の系統を引き、「稲田」によって稲作との関係を示す。クシは奇シウツクシ(美称)ともまた八俣のおろち退治の時、櫛にして隠されたことによつて櫛ともされるが、大勢に影響はない。スサノヲがこれをヤマタノオロチから救って妻にしたのは、稲作農への寄与に外ならない。

この婚姻関係で、もう一度スサノヲ神を見直す必要がある。古事記では、本来父神によって「海原を治めよ」と命じられたのであるが、領分を治めないばかりか、泣きいさち、青山は枯山になす。そこで父神から理由を尋ねられ、「我は母の国、根の堅州国に罷らむと……」と答える。すると父イザナギ神は大いに怒って「汝はこの国に住むべからず」と仰言つてスサノヲ神を「神やらひにやらひ賜ひ……」しかも、これをもってイザナギ神は神事終え、「故、そのイザナギノ大神は、淡海の多賀に坐すなり。」と記されて話は一段落する。(記)

この話に、筆者は素朴な疑問を抱かざるを得ない。それは父イザナギの激怒の理由もさる事ながら、「スサノヲ神を地上に追放して、さて、イザナギの大神も地上国の多賀に坐す」と語るのはなぜだろうか?の点である。

実はこの疑問は、先年「稲作用地名と神話・伝承」を執筆したとき既に感じていたが、解明できなかったので触れなかった(後述)。

さてスサノヲ神は姉天照大神に挨拶してから下ろすと、天上に登る。これも姉からは「天の国を奪う気か?」と疑われ、それを晴らし、勝ち誇って本性を露わにして暴れる。などの曲折があり、天照大神の岩戸がくれば惹起し、遂に天上神たち一同の怒りを招く。結果的に父神に勘当されたばかりでなく八百万の神たちの総スカンを喰って地上に降るのである。

ここに至るスサノヲの行状は、「泣く。山を枯らす。溝を埋め、田を破壊する。殿を汚す。建物を壊し、人畜を死に至らしめる。」これみな暴風雨や自然災害の表現と見られ、従来も「荒の男」の意として見られた。これは地上に降るまでについては妥当である。

ところが、地上に降るや一転してクシイナダ姫を助ける。このヤマタのオロチ退治も、彼の荒の一面でないことはないが、明確に善玉に生れ変っている。これは稲作中心の農業への貢献であった、この面についてはまだ十分な説明がなされないまま、種々な論議がなされているように

ある。筆者の考えを箇条的に記せば次のとおりである。

スサノヲ神は、1. 上流の山に土砂崩れを起こし、浸食し、下流に運び、細かい土砂を堆積させて農地を造成した。2. 彼の作用は川に沿っていて、天(山)から降り、地を流れる。3. 彼の力が強く現われるのは暴風雨・洪水などに伴う土砂流で、これが荒の面である。4. 下流部に低平地を作った。これは洲・砂で、スサノヲのもう一つの面である。5. この作用は全国各地で見られ、従ってスサノヲ神は各地に祀られている。6. 天孫族は稲作に強い結びつきがあるが、スサノヲは天孫降臨や地上国平定より先に地上に降り、農業(特に稲作)の基盤を整えた。7. スサノヲが悪業によって追放されたように表現されているのは、いわば文学的な構成であって、真実はスサノヲこそ先に地上に降りなければならぬ。天孫降臨の布石に当る。8. 暴風雨の神であるが、大地に力を及ぼし、結果的に大地そのもの(が表す自然現象)の神でもある。よって彼の身体から種々な植物が生長した。

なお、天孫族が地上に降りたのは、日本人が縄文期には高台に棲み、稲作に伴って低地に降った(大体弥生期からの特色)ことの表現とみれば筋が通る。

山陰地方には「稲イネ・ヨネ」地名が注意をひく。川によって堆積した微細粒の土壤をヨネと言ひ、これが「所・処」の意のヨを伴ったが「米子」であり、田になったのが「稲田」である。スサノヲ神の「須佐神社」にすぐ隣接した所の地名も「稲田」であり、出雲大社の西海岸も「稲佐」である。

次に⑥スセリ姫について——この娘は、出生が明かでない(母不明)。しかしスサノヲの邸に居り、スサノヲが「その我が女スセリ姫……」と大国主神に詔うたことで娘である点は疑を容れない。さてスセリ姫の名義は従来不明とされたままのようであるが、筆者の見解は以下のとおりである。1. 本論に自然地名ス・スセ・セリをのべたとおり「洲迫り(上り)」で土壌の堆積して行く事を表す。2. それがスサノヲの娘(スサの結

実)であることは極めて自然である。3.スセリ姫の母については記載がないが、川の堆積という自然現象によるのだから不要でもある。4.ス川が迫り上るのは概して下流で、事実、この女神がいましたという伝承が^{〔山形県神川下流の湖陵村にあり、湖陵村は湖陵村の南にあり、湖陵村は湖陵村の南にあり、湖陵村は湖陵村の南にあり〕}出雲市の西南から湖陵村にわたる滑狭に^{〔湖陵村は湖陵村の南にあり、湖陵村は湖陵村の南にあり、湖陵村は湖陵村の南にあり〕}あつた。5.スセリ姫は大国主神と結婚する。大国主は後に少彦名神と協力して営農に功ある神だから、この結婚は順当であろう。

最後に②③④である。この三女神の生れ方は特殊である。ササノヲ神と姉天照大神とが互いに所持品を交換し、噛み砕いて吹き出した霧から生まれたもの。どちらの子か(生み出した行為者とは別に)について所伝間に相異があるが、「三女神は、ササノヲ神の物から生まれたからササノヲ神の女」と天照大神が判定した^{〔記、第六段本文〕}もの(天照大神の女とする考えもあるが)。1.タキリ姫は「滝(滾)り」と解されてササノヲの水の作用に結びつく。2.イチキシマについては未考であるが、イチはやはり崖地・不整地の意か? 3.タキツは「滝(滾)つ姫」と見られて1.に似る。「(たき)つ姫」のつは格助詞のに当るつか。(書紀には「田心姫」とあり、コリを「霧」とするのが普通だが「凝り」ともとれるか。そうならば、田の土が乾いて緊る意となる)。9.のタケミナカタ神は「宗像」に縁があるか、とされているが、出雲系の神の末であり、長野県のスワに逃れた。

以上、自然地名から全てが解明されたわけではないが、筆者としてはスセリ姫が解けたことで満足できる。

結 論

一、生成的観点より見た自然地名

一般に言語は「文化遺産」として受容・継承するものとされている。地名もまた何らかの動機・着想によって名づけられたものを使い続けていると言っておりよい。

さて、自然地名はどんな特色をもつてであろうか? 古来、大地は不動なものに譬えられる。しかし、更めて考えるまでもなく、川は水が流れ、海岸には波が打ち寄せ、空には風が吹く。とりわけ暴風雨は、地上物の倒壊・土砂崩壊・洪水を惹起し、上流部が削られ、下流部は堆積する。現代、河川は護岸され、ダムが作られて、水害の報に接することは昔にくらべて格段に少なくなったが、その目で古代を見ては正解を期しえない。そういう所は一洪水ごとに地形が変わったと言っても過言ではあるまい。その変化・生成を上代人は眼前に見ながら生活していたのである。

山あいの谷から大量の土砂が押し流されてくる。その当^{〔土流部〕}初こそ岩が露れ、草木なども倒れ混じているので「荒」れ果てた相を呈する。しかし後には、土砂も次第に細かくなり、平らに堆積し、しかも動植物の有機質が腐敗したものを多量に含んで肥沃である。荒から洲砂を生み出し、それが農地として好適である。「洲砂」は「洲処」とも言い得、これは「菅」と書かれることも多い。古代伝承に「菅の地に至って清々し」と感じてそこに住む話が幾つかあるのは、ここが生産力に富む事とも関係があるかと思われる。ササノヲ神が荒む神で恐ろしい反面に農業の保護育成者であるゆえんはここにある。こういう事は、大地を静止した物として見ているわけではない。筆者は先に「アキ地名」について「剝落・崩壊・浸食から下流への堆積という動態として見るべき」ことを述べたが、今回も同様である。

このように動態で見るべき証として、動詞と組んだ自然地名があることをあげる。先行論文に示した「坂出」「尼出」、その外「秋成」「砂押」「須走」も「砂走」であろう。これら皆、「主語+述語」の構成と見得る。今回のサ行語頭の例では「芹出」^{〔山形県山形市〕}がある。これは複合動詞あるいは主語+述語^{〔動詞〕}と見得る。いずれにせよ大地を動態として見た一証である。

どちらかと言えば実態的な「ス(砂・洲)」に対し、どちらかと言え

ば動態的(動的)な「セ(迫)」が続いて「スセ」があり、また殆ど動詞と見ていい「セリ」がある。そうすれば、

ス(主語)十セリ(述語・動詞)(非スセ・リ)

という地名があり得る。この形は「スセ」を更に明確に動詞化したと言える語形である(もつともスセリという地名はまだ見出してない)。本論にのべたとおりササノヲ神の娘が須勢理姫であるのは極めて自然である。見出されたのは、セリ(スセリでなく)であるが、その上流にササノヲ神を祀る神社(高松神社)があり、その下流にセリ地名がある(滋賀県多賀町八重練・彦根市芹町)のは示唆に富む。

ササノヲ神を、単に「荒・武・暴」とのみ考えるのではなく、彼の親族子孫を一貫して生成的にみることによって、彼が生み出した子から逆に彼の真実の一端が明らかにされると考えられる。

二、種々な関連

自然地名に着眼し、地形・地質・川の作用を見つづけてきた。はじめのうちは気づけなかったが、視野に入った地名語が多くなつて浮上したのが、この「関連」である。

本論文中でも「サセボーサザ」「ウサーササレ」などがあつた。こういう関連も今までは語形が類似するものの中で考えてきたが、今回の研究でスズカ(鈴鹿)―セリカハ(芹川)―タガ(多賀)―セリ(芹)などの地名とともに、「多賀」―ササノヲの神・スセリ姫(スセ)などが語形の類似以外に及んで相互関連をもつことが明らかになつた。

本論第二章に、イザナギの神はササノヲを天上国から追放し、直ちに近江の多賀に坐すと語られるのは何故か?に触れた。この多賀については既に述べたことがあるが、そのとき調査したのが多賀神社に比較的近い範囲であつたため、川の「滝状の流れ」と結びつけた結論もいまひとつ迫るものが足りなかつた。しかし今回、上流の土砂崩れ浸食(荒―ササノヲ神)と下流の堆積(迫り上り―スセリ姫)とを川に結びつけて見る考え方をすると、正に地名地相が一貫して結びつくこ

とが確められた。即ち、最上流は断層を伴って険しく、浸食の激しい鈴鹿山脈(最北端)で、中流の八重練(ちょうど低地に降つた所)にササノヲ神を祀る高松神社がある。少し下つた多賀には、イザナギ神が神鎮りまし、最下流で土砂の堆積地がセリ(芹)とよばれる。その川全体が芹川である。これはまさに、本論にのべた「崩壊・浸食―運搬・堆積」の川の作用が自然地名にあらわれたものに外ならない。

更に興味深いのは、この八重練に伝えられた伝承ならば、古事記に感じた疑問は解消されることである。この伝承は既に転載紹介したが、要所のみ再録する。

大字八重練高松神社には、素戔嗚尊が祀られてあります。神代の昔、素戔嗚尊は、伊弉諾尊、伊弉冉尊、事勝国勝長狭命と共ども、杉坂山御神蹟に御降臨になりましたあと、旧杉坂道をお降りになり、杉坂山山麓八重練高松の地にお着きになりました。

素戔嗚尊は他の神がみをはばからず、まっ先にここを安らぎの地にお定めになりました。事勝国勝長狭命は、伊弉諾尊、伊弉冉尊が多賀の清地に鎮まりますことを、おみとどけになりましたあと、敏満寺胡宮に宮居をおさだめにされましたと、昔話に聞いております。(後略)

以上、八重練の吉田さき氏の伝承である。『多賀町の民話集』(多賀町教育委員会編集)所収。

母イザナミ神は火神出産の時の火傷で先立っているのが一緒であるという所伝の違いはともかく、イザナギ神はササノヲ神を追放どころか、一緒に天降りしている。古事記で子息を地上に追放すること、自らが地上国の多賀に鎮っていることを続けて語っている不自然は、この伝承のような語り方ならば解消する。そして、神々とその宮の位置関係が自然地名と整合している(ただ、マツ地名の解明が残っているが、まず川筋などの尾根状の地形を言う点は動かないであらう)。この伝承の示唆深さも既に指摘しておいたが、今回芹川を、その水源

地の地相から一貫してみて、更めてこの意味深さがわかった。記紀のような一級史料ばかりでなく、細々と地方に語られた伝承にも深い意味がかくれている事があることに注意して行きたい。

この八重練の伝承は、ササノヲ神の本拠たる出雲地方を遠くはなれているのに、川の作用と地形・地名が関連し、出雲以上にササノヲ神・スセリ姫の真義に迫るものである。またササノヲ神とともに考えてこそイザナギ神とその宮居たるタガの本義が明確になる。更に記・紀・風土記などでは十分明かにできない一側面が明かにされていると信じる。

また、イザナギ神・イザナミ神・ササノヲ神を一緒に祀る例は、岩手県遠野市の多賀神社にもあり、なお外にもあると思われるので、今後の課題の一つにしたい。

さて、一言加えると、ササは、結果的に「荒^{スサ}」と「洲砂^{スサ}」との両義を持つと言える。もちろんこの二つは、それぞれ理解されていたことである。しかし、この二つの意味に関連があるとする考え方とその方法が噛み合った論はなかったと思われる。

了

(一九九四・八・二五)